

「寮長……っ？」

視界に彼がいない分、不安が増す。

そんな恥ずかしい場所に入り込まれて一体何をされるのかと身構えた瞬間、

「ああ…っ！？♡♡」

少年は不自由な体勢で、エビぞりになってのたうった。

その小さな尻の<sup>あわい</sup>間に、突如、細長いものが<sup>そうにゆう</sup>挿入されてきたのだ。

「い、やあ……っ！」

完全に、尻孔のなかにそれは侵入してきている。

時折くねくねとうごめくこれは、もしかして、寮長のあの美しい指ではないだろうか——。少年は驚きに目を見開いてもだえた。

「君みたいな生徒は念入りに調べないとね。さあ、この中に一体、どんな違反物が入っているのかな？」

「！あああ…っ♡♡」

寮長の指がずぶずぶと深く沈み込んできたかと思うと、なかで関節をゆっくり曲げ伸ばしされる。狭い孔を無理くりこじ開けられる感覚に、全身が栗立った。

「何？腰びくびくさせて……。なあんか怪しいよね」

「ひい…っ！♡ん、」

何かをさぐるようにゆっくり大きく動いていた寮長の指がとある一点をかすめたたん、自分でも可笑しいほど腰が跳ねあがってしまう。

「あれえ？何？ここに何かあるの？」

「アッ♡♡いやっ！だめえ…っ！！、♡」

寮長の指頭に、とん、とん、とん、と先程と同じ箇所——腹側の中間付近——をつつかれる。

それはとても軽い力なのに、少年は空中で何度も背を仰げ反らせてしまう。つつかれる場所から甘苦しい電流が体内を駆け、下腹部にぞくぞくとした熱が溜まっていく。

「どうしてここ、こんなになってるの？」

「あぁっ！♡」

孔に指を挿し込まれたまま、もう片方の手で幼茎に触れられる。

先程精を放ったばかりだというのに、そこは再び色づき、小さな頭をもたげはじめていた。

「君はまた僕に隠し事をしていたね？何？これは。どうしてここを押されて、こっちがこんなになるわけ？」

「ひッ…♡あぁあ…っ♡」

ここ、こっち、と言われながらそれぞれの場所をつつかれて、自分のものとは思えない甘い悲鳴が漏れてしまう。

「何もしないで、こんなえっちな躰になるわけないよね？何？誰かに普段<sup>さわ</sup>触らせてるわけ？」

「ち…ちがいます…っ…あぁッ♡♡あぁあっっ♡」

「じゃあどうしてこんなことになってるの？」